

## 「ベトナム難民」の「定住化」プロセス

### －「ベトナム難民」と「重要な他者」とのかかわりに焦点化して－

○ 愛知みずほ大学 荻野 剛史 (4808)

キーワード：ベトナム難民 定住化 重要な他者

#### 1. 研究目的

1975年以降、ベトナムの政変を背景としたベトナム難民が発生してから30年以上が経過したが、この間約8,000人のベトナム難民が日本での定住を選択し、政府や民間団体は彼らに対して定住までの諸援助を提供してきた。その一方で彼らは定住初期から現在に至るまで、一貫して様々な生活のしづらさを経験してきた。このため彼らに対する援助方法を明らかにすることが必要であるが、それ以前の問題として彼らの日本における生活のありようが明らかになっているとは言い難く、まずこの点を明らかにする必要がある。本研究では「ベトナム難民」（滞日ベトナム難民）を滞日難民全体の人口に占める割合の点で、また日本での生活期間の長さから滞日難民の典型と捉え、「ベトナム難民」の「定住化」プロセスを、特に「重要な他者」とのかかわりの側面から明らかにすることを目的とする。

#### 2. 研究の視点および方法

「ベトナム難民」の定住プロセスに関する先行研究では、地域社会や国家など、比較的メゾ・マクロ的な環境とのかかわりに焦点化した難民の定住化プロセスが述べられているが、本研究では「ベトナム難民」と「重要な他者」とのかかわりという、ミクロ的な側面に焦点化した「定住化」プロセスを明らかにする。これは、他国と比較して受けることのできる援助がせい弱だった「ベトナム難民」は、実質的に「重要な他者」から生活上の諸援助を受けて生活せざるを得なかったという経緯があるため、「ベトナム難民」と「重要な他者」のかかわりに焦点化した「定住化」プロセスを明らかにすることで、生活のしづらさに対して「ベトナム難民」がどのように対処してきたのか、また対処の結果、当初は援助を要する人々であった彼らがどのように変化したのかを明らかにできるためである。

本研究では、上記の目的のために、半構造化面接を実施した。調査対象はA小地域に居住し、かつ生産年齢（15～64歳）時に来日した「ベトナム難民」であり、インタビューのデータは修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）により分析した。

#### 3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会の「研究倫理指針」に基づく倫理的な配慮の上で実施した。インタビュー開始前に対象者に対してインタビューの目的、データの使い方などを説明し、インタビュー終了後に書面によってデータ利用の同意を得た。また調査時点で筆者が所属していた大学院の倫理委員会の承認を受けた上で実施した。

#### 4. 研究結果

調査・分析の結果、「ベトナム難民」の「定住化」プロセスを表すストーリーラインにおいて、以下の〈カテゴリー〉と【概念】が見い出された。

##### 1) 〈受動的な『重要な他者』の取得〉カテゴリー

このカテゴリーは「他の人の力によって受動的に『重要な他者』を取得する」ことを意味し、「ベトナム難民」が「重要な他者」と出会い、この「重要な他者」から様々な「定住化」のための援助を受ける局面を表し、【受動的な出会い】【差別なき付き合い】【不安への被援助】【適応のための被援助】【『重要な他者』の取得】という5概念から構成される。

##### 2) 〈『普通』の付き合い〉カテゴリー

「ごく日常の付き合い」を意味するこのカテゴリーは【かかわりの回避】【日本語での会話困難】【普通の付き合い】【ベトナム流の付き合い】【『気遣い』ある付き合い】【『したたか』な付き合い】、そして【立場ゆえの指摘困難】の7概念から構成される。「ベトナム難民」と「重要な他者」との日々の付き合いかたを表す局面である。

##### 3) 〈受身からの脱皮〉カテゴリー

このカテゴリーは、上記の2カテゴリーを踏まえ、「ベトナム難民」が「より独立した生活を目指す」ことを意味する。【肯定的機会の被供与】【被援助経験の捉えなおし】【『更なる』独立志向】の3概念から構成される。

##### 4) 〈交互作用の深化〉カテゴリー

これは、〈受動的な『重要な他者』の取得〉から始まる一連のプロセスの最後の部分にあたり、「重要な他者との交互作用関係が深化する状態」を意味するカテゴリーであり、【相手への働きかけ】【親近化の感覚取得】【相互扶助の感覚取得】の3概念から構成される。

##### 5) 〈違いの認識〉カテゴリー

以上のプロセスを経ながら「ベトナム難民」の「定住化」は進むが、このプロセス全体に影響を及ぼしているのが「『重要な他者』との違いを認識すること」と定義される本カテゴリーであり、【違いある付き合い】と【よそ者感の取得】の2概念から構成される。

#### 5. 考察

以上の結果から、「ベトナム難民」は「重要な他者」との交互作用をつうじて生活力を獲得しながら日本で生活し続けていると指摘でき、祖国への帰還が困難な「ベトナム難民」にとって「重要な他者」は、大きな意味を持つ存在であると指摘できる。

一方、「重要な他者」による手助けは、必ずしも社会福祉的な視点が含まれているとは言えない。このため「ベトナム難民」の援助にあたり、「社会福祉における援助観を理解した人」による援助の必要性が示唆された。

※本研究は、平成22・23年度文部科学省・日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究(B)課題番号22730453）による成果の一部である。